４．瓦の位置づけ

小林　康幸

はじめに

出土瓦の整理によって満願寺の寺史の一端が考古学的に明らかになっただけでなく、神奈川県東部、三浦半島地域における中世瓦の様相が明らかになったことには大きな意義がある。ここでは満願寺遺跡出土瓦について、最初に軒瓦のセット関係を明らかにし、瓦の年代を考えたうえで鎌倉の瓦との比較を行い、八事裏山窯産瓦の満願寺遺跡への供給についても言及し満願寺出土瓦の位置づけを考察する。

軒瓦のセット関係

満願寺遺跡出土瓦の年代的な変遷を検討するにあたり、出土瓦とりわけ軒瓦（軒丸瓦・軒平瓦）のセット関係を明確にしておく。これまでの整理作業から満願寺遺跡出土の軒瓦には次のとおり３種類のセット関係を見出すことができる（第 52 図）。

セット１　軒丸瓦ＭＡⅡ＋軒平瓦ＭＮⅢ

セット２　軒丸瓦ＭＡＩ 01 ＋軒平瓦ＭＮＩ 01

セット３　軒丸瓦ＭＡＩ 02 ＋軒平瓦ＭＮＩ 02 または軒平瓦ＭＮＩ 03

セット１は八事裏山窯産の瓦で構成されるセット関係である。生産地において考えられている瓦の年代は 12 世紀末であり[(1)]、文献史料上で明らかな満願寺の創建年代である寿永三年（1184）頃と大きな齟齬はない。満願寺遺跡におけるセット１の出土点数は少量であり、出土瓦全体に占める割合も低い。創建時における満願寺堂宇の規模も明確ではないが、一応、セット１の軒瓦を「満願寺Ⅰ期瓦」＝創建期瓦ととらえておく。

セット２とセット３は基本的に同文のセット関係である。遺物として検討すれば、セット２の方がセット３より若干古い瓦と見ることもできるが、瓦が堂宇の屋根に葺かれた状態としてはおそらく同時期の瓦群であろう。

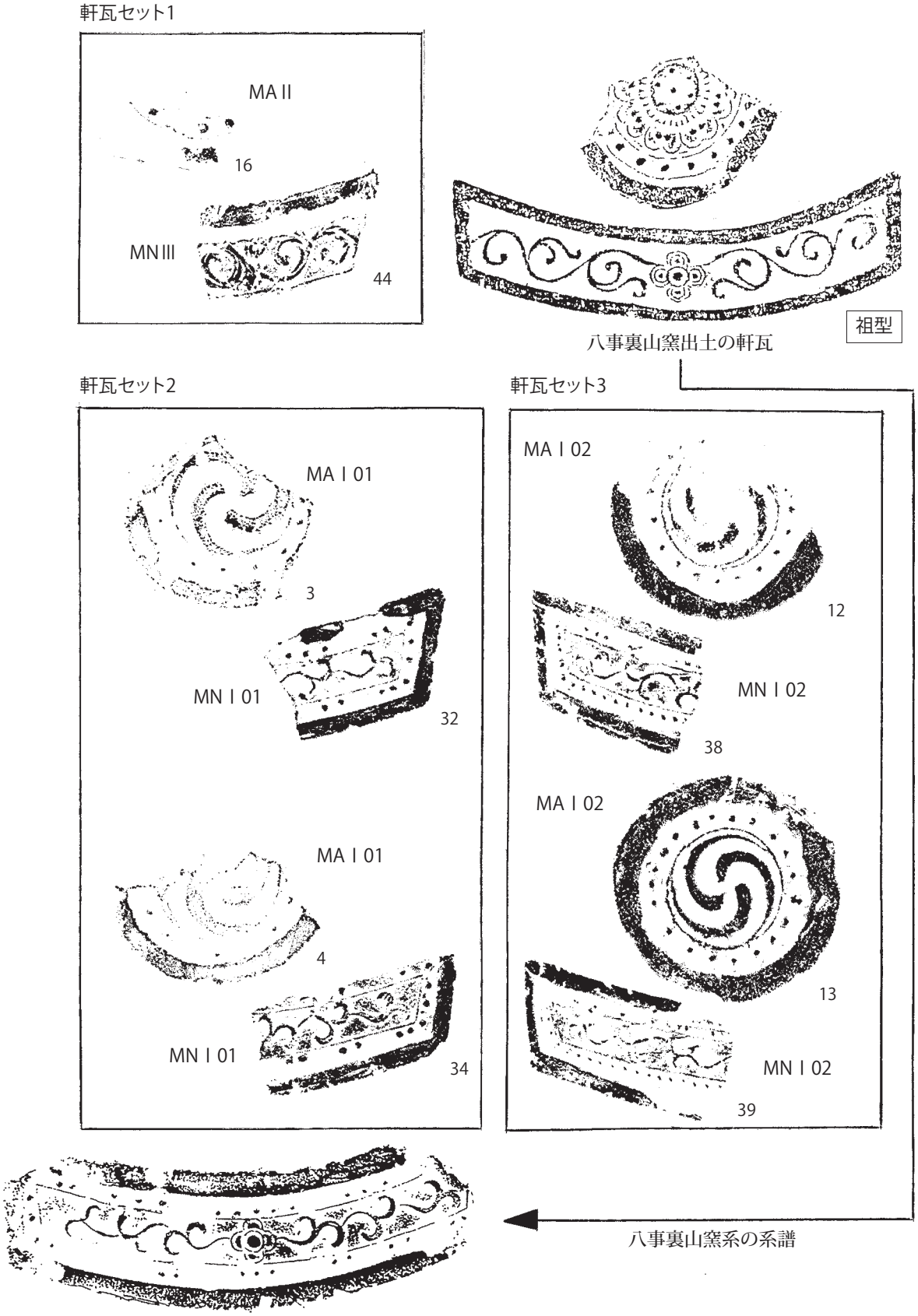
軒平瓦ＭＮＩ 01、ＭＮＩ 02 及びＭＮＩ 03 は４弁の瑞花や唐草が簡略・単純化されているが、その文様は軒平瓦ＭＮⅢ、すなわち八事裏山窯の軒平瓦を祖型とする「八事裏山系」の瓦である。過去に出土した瓦当文様全体がよくわかるＭＮＩ 01 を第 52 図に掲載した。ただ最大の相違は軒平瓦ＭＮＩ 01、ＭＮＩ 02 及びＭＮＩ 03 とセットになる軒丸瓦が蓮華文軒丸瓦ではなく、三巴文軒丸瓦であるということである。この差は年代差を示す要素であり、セット２、セット３をセット１よりも後出の組合せと考える要因の一つである。

セット２及びセット３の軒瓦とともに屋根を葺いたとみられる平瓦はＭＨＢ 02 ａやＭＨＢ 03 ｂであるが、これらの平瓦が凸面に大きな単位の格子目の叩きを有する平瓦であることから、セット２及びセット３の軒瓦を「満願寺Ⅱ期瓦」ととらえておく。

なお今回の整理作業では軒平瓦ＭＮⅡと組合せになる軒丸瓦は明確に見出せていない。このため現時点ではセット４を見出すことが出来なかった。

瓦の年代

満願寺は寿永３年（1184）頃に創建したと伝えられているが、創建期の堂宇が瓦葺であることを前提とするならば寺史のとおり創建期の瓦は 12 世紀末の瓦となる。創建後の堂宇については、火災であるとか修理・再建といった具体的な記録は伝えられておらず、堂宇の変遷を知ることが出来ない。ただし断片的な記事ではあるが、『泉涌寺不可棄法師伝』という史料に重要な手掛かりを見出すことが出来る。



第 52 図　満願寺遺跡出土瓦のセット関係

史料の内容を全面的に支持するのではなく、まず発掘調査の成果から考古学的に判明している事象をふまえたうえで、史料との突合せを行うこととしたい。考古学的に判明している事象は次のとおりである[2]。

・瓦は層位的に大きく上層と下層にわかれて堆積していること。

・発見された礎石建物の前面には瓦を敷き詰めた遺構が発見されており、敷き詰められた瓦がこの礎石建物以前の堂宇（瓦葺建物）に使用された瓦であると考えられること。

このように満願寺は寿永３年の創建以降、明らかに堂宇の再建ないし規模拡張が行われた状況が確認できる。この状況が満願寺Ⅱ期の姿であり、セット２及びセット３の軒瓦、そしてこれらにともなう凸面に格子目の叩きを有する平瓦（平瓦ＭＨＢ 02 やＭＨＢ 03）がこの時期の瓦となるのである。特に凸面に格子目の叩きを有する平瓦が 13 世紀前半から中頃の瓦であることから、この年代が満願寺Ⅱ期の年代になると考えられる

『泉涌寺不可棄法師伝』は京都・泉涌寺の開山である月輪大師俊芿（しゅんじょう）（1166 ～ 1227）が貞応３年（1224）に佐原義連の子、家連に招請されて家連の三浦館に至り、梵宇（＝寺院）を供養したことを記している。

家連の三浦館の梵宇が満願寺であると考えられている。泉涌寺は俊芿が開山となり建保６年（1218）から大伽藍の造営を開始し、嘉禄２年（1226）に完成している。俊芿が満願寺を訪れたのは泉涌寺造営中のことであるとともに、俊芿の生涯の最晩年といえる時期である。この時期に京都の高僧を招くことが出来た佐原家連の力の大きさを窺い知ることが出来る。俊芿が「梵宇供養」を行った貞応３年（1224）が満願寺Ⅱ期の年代であり、考古学的に想定した満願寺Ⅱ期瓦の年代に符合するのである。

以前、相模の中世瓦を概観した際、今回の検討で満願寺Ⅱ期瓦とした瓦を満願寺の創建期瓦と認識したため、当時はそれらの瓦を相模東部の中世瓦編年においてⅠ期（12 世紀末から 13 世紀初頭）に位置付けたが[3]、今回の検討により編年（年代観）をⅡ期（13 世紀前半から中頃）に訂正しておきたい。

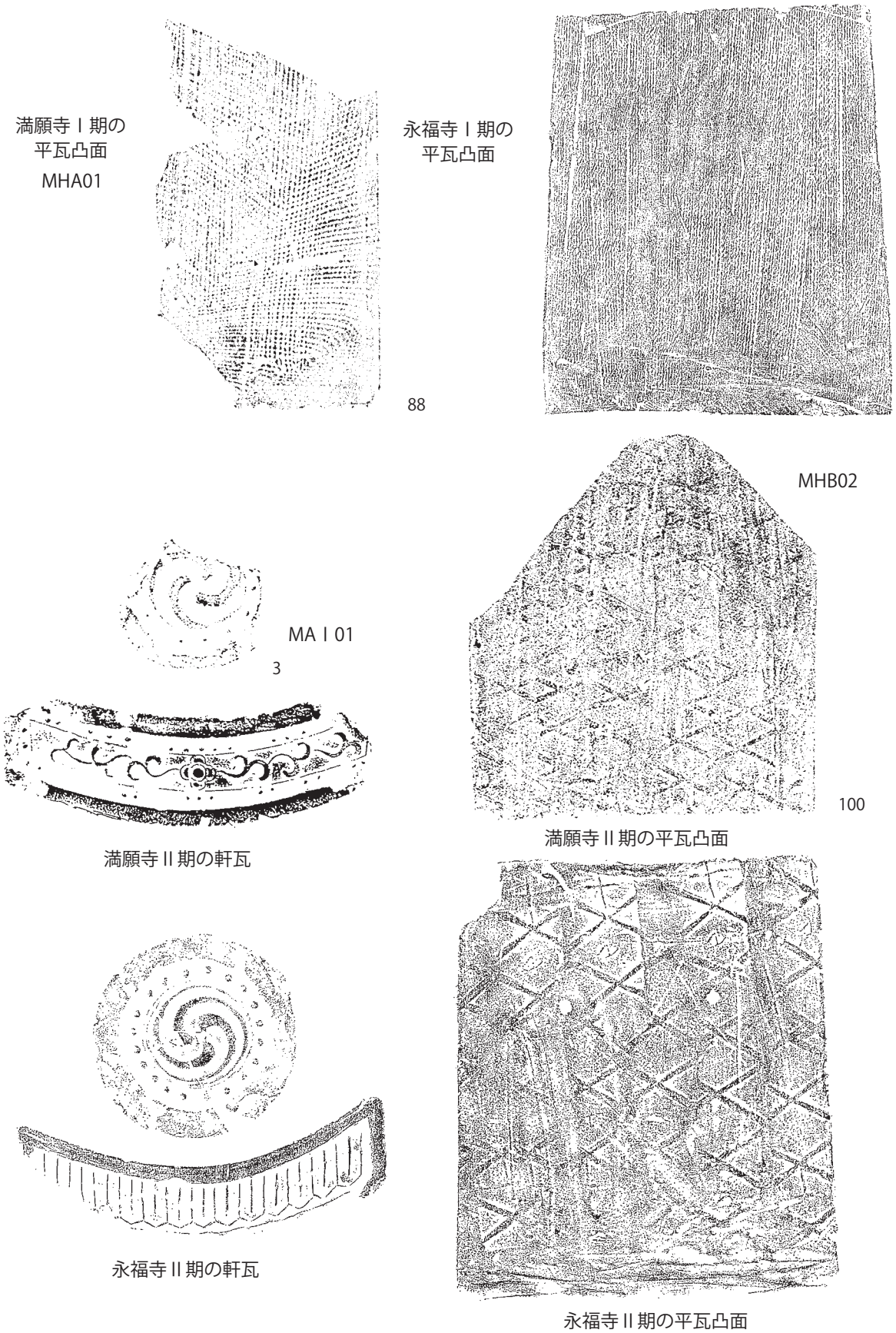
瓦については年代以外にも検討すべき課題が存在する。満願寺Ⅰ期の瓦にはセット１の軒瓦以外に平瓦ＭＨＡ 01 が存在する。ＭＨＡ 01 は混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な平瓦である。凸面には縦方向に縄目の叩きが確認できる。この平瓦は鎌倉永福寺の創建期に使用された平瓦と同一の特徴を有しており、12 世紀末の瓦と考えられる。埼玉県北部、児玉地域の瓦に極めて似た粘土を胎土としており、同地域で生産されたものであろう。問題はこの平瓦がセット１の軒丸瓦ＭＡⅡ＋軒平瓦ＭＮⅢとともに満願寺創建期の屋根に葺かれたかどうかである。軒丸瓦ＭＡⅡ＋軒平瓦ＭＮⅢと同質の平瓦としてはＭＨＣが存在している。だがこのＭＨＣは出土点数が極めて少なく、仮に堂宇の軒先だけをセット１の軒瓦で葺いたとしても屋根全体を葺く平瓦が量的に不足することになる。この不足を補う瓦として平瓦ＭＨＡ 01 が使用された可能性が考えられるが、確証を得るには至っていない。

満願寺の発掘調査は文化財収蔵庫の建設にともなって実施された調査であり、発見された遺構についても保存も図られたことから下層遺構の全体像解明について十分な成果を得るには至らなかった。調査で取り上げられた瓦もそのほとんどが上層の遺構にともなう瓦（Ⅱ期瓦）であり、Ⅰ期瓦の多くは現在も境内の地下に埋蔵されている。Ⅰ期瓦の全容解明は今回の資料整理でも限界があり、将来、下層の遺構やそれにともなう瓦を調査する機会に恵まれるならば、その機会に委ねざるを得ない。

鎌倉の瓦との比較

次に満願寺出土瓦を鎌倉の出土瓦と比較してみたい。比較するのは建久５年（1194）に創建された永福寺の瓦である。

鎌倉の永福寺は周知のとおり、鎌倉幕府を創設した源頼朝が奥州合戦で平泉を訪れた後に、平泉で目にした中尊寺などの精舎に感銘を受け、敵味方を問わず合戦の戦没者を鎮魂することを目的に創建した寺院である。一方、満願寺は寿永三年（1184）頃、佐原十郎義連によって創建された寺院である。



第 53 図　満願寺遺跡出土瓦と永福寺跡出土瓦の比較

満願寺遺跡では創建期の瓦（＝満願寺Ⅰ期瓦）として八事裏山窯産の瓦が出土しているが、永福寺でも創建期の瓦として八事裏山窯産を含む尾張産の可能性の高い瓦が出土している。その採用は満願寺が永福寺より 10 年早いことになる。ただし、永福寺では八事裏山窯産の瓦が創建期瓦の主体ではなく、量的にも少量で客体的存在であることを留意しておかなければならない。

満願寺遺跡の平瓦ＭＨＡ 01 は凸面に縦方向の縄目の叩きをもち、混入物がほとんどない精良な粘土を胎土とし、焼成が硬質な平瓦であるが、永福寺跡でもこれと同一の特徴をもつ平瓦（女瓦Ａ類）が出土している[4]。この平瓦は永福寺創建期の平瓦の主体を占めるものであり、同質の丸瓦とともに使用された状況が確認されている。満願寺遺跡の平瓦ＭＨＡ 01 は丸瓦ＭＭＡとの組合せが考えられる。こうした特徴を有する永福寺創建期の丸瓦・平瓦は埼玉県児玉郡域で生産され搬入された瓦と考えられているが、同地域で生産された瓦は満願寺でも使用されていたことが明らかになった。鎌倉と横須賀は約 20㎞離れた位置関係にある。

満願寺Ⅱ期瓦とした軒瓦セット２（軒丸瓦ＭＡＩ 01 ＋軒平瓦ＭＮＩ 01）、軒瓦セット３（軒丸瓦ＭＡＩ 02 ＋軒平瓦ＭＮＩ 02）にともなう平瓦は、凸面に比較的大きな単位の格子目の叩きを有するＭＨＢ 02、ＭＨＢ 03 である。凸面に比較的大きな単位の格子目の叩きを有する平瓦は永福寺跡でも出土しており、女瓦Ｃ類として分類されており、永福寺Ⅱ期とされる寛元･宝治年間の修理瓦（1240 年代）として出現している[5]。これらの平瓦は 13 世紀前半から中頃という年代でも一致する瓦である。ただし先に述べたとおり、満願寺Ⅱ期の瓦は貞応３年（1224）の堂宇造営時の瓦と考えられるので、永福寺Ⅱ期（寛元・宝治年間修理）の瓦よりも 10 数年古い瓦ということになる。このことは満願寺瓦のもつ重要な意義として認識しなければならない。

第 53 図に示したとおり、満願寺遺跡も永福寺跡もⅡ期の軒丸瓦は三巴文軒丸瓦であるが、セットになる軒平瓦の瓦当文様が満願寺遺跡は唐草文、永福寺跡は下向き剣頭文という違いが生じている。満願寺Ⅰ期のＭＮⅢの軒平瓦はⅡ期においても生産地が異なるものの、同一の文様系譜に連なる「八事裏山系」の軒平瓦として引き継がれている。にもかかわらず軒丸瓦はⅠ期の蓮華文軒丸瓦がⅡ期には三巴文軒丸瓦へと転換しているのである。

先にも述べたように満願寺の創建は永福寺より 10 年早いが、永福寺創建期の主たる軒瓦は「八事裏山系」の蓮華文軒瓦と唐草文軒平瓦の組合せである。この組合せの軒瓦は 2001 年に永福寺式軒瓦と呼ぶことを提唱し[6]、現在では一定の定着がみられている[7]。

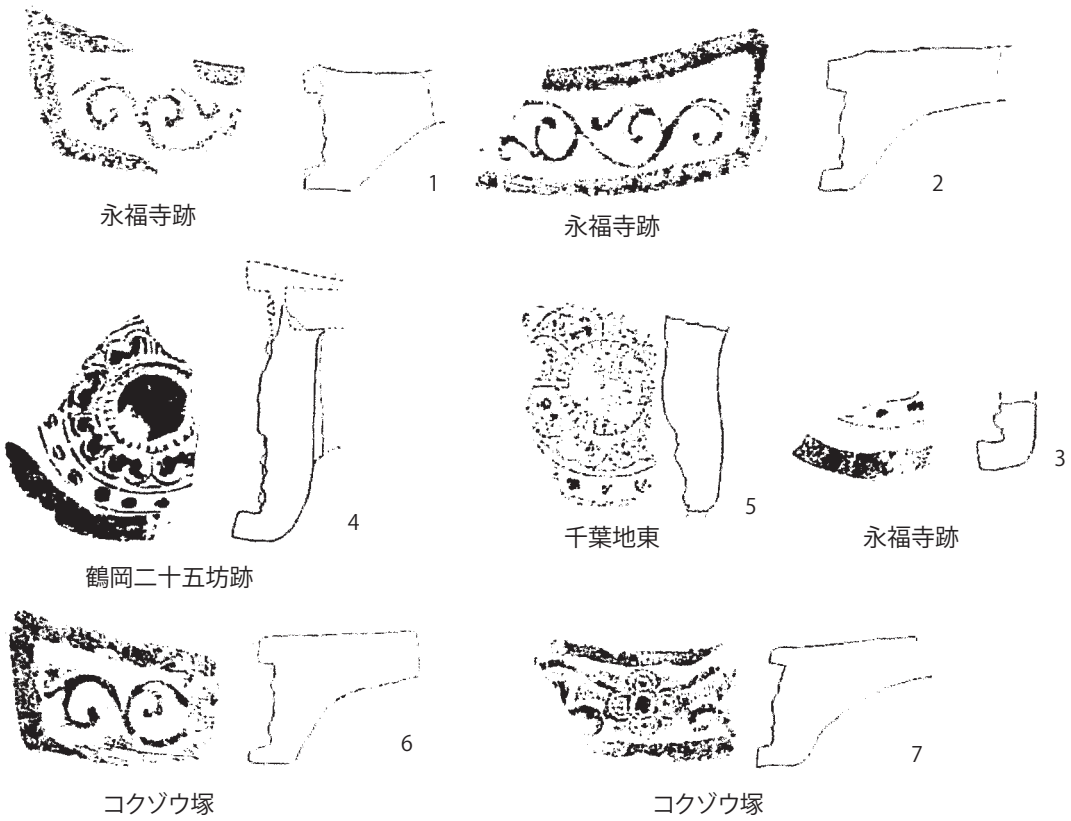
永福寺Ⅱ期の平瓦（＝女瓦Ｃ類）は埼玉県美里町の水殿瓦窯で生産された瓦であることが判明しているが[8]、永福寺Ⅰ期の瓦も水殿瓦窯周辺の児玉郡域で生産された可能性が高い。満願寺Ⅰ期の丸瓦ＭＭＡや平瓦ＭＨＡ 01 は永福寺Ⅰ期の瓦、さらに永福寺Ⅱ期の瓦とその胎土が非常に似ていることから、同様に埼玉県北部の児玉郡域の瓦窯で生産された瓦と考えられる。

八事裏山窯産瓦の満願寺への供給

八事裏山窯で生産された瓦のうち４期（12 世紀末）の瓦はこれまでのところ相模国以外での出土は知られていない。相模国内での出土は伊勢原市、鎌倉市、そして横須賀市の３地域に限られている[9]。具体的な出土地は伊勢原市のコクゾウ塚[10]、鎌倉市の永福寺跡[11]、鶴岡二十五坊跡[12]、千葉地東遺跡[13]、そして横須賀市の満願寺遺跡である（第 54 図）。筆者は以前、相模における八事裏山窯産瓦の供給先寺院（Ｘ寺）の候補地のひとつに満願寺を想定した[14]。

このように極めて特殊な出土傾向を示す八事裏山窯産の瓦が一体、どのような理由により満願寺で出土するのであろうか。その歴史的な背景について考えてみたい。

満願寺を創建した佐原十郎義連は鎌倉時代の有力御家人、三浦義明の子（十男）で、三浦本家から分



第 54 図　相模出土の八事裏山窯産瓦

かれて佐原氏を名乗った人物であり、武芸（弓馬）に優れた武士として知られている。源平合戦における一ノ谷合戦における鵯越えのエピソードは有名である。また満願寺には国指定重要文化財の観世音菩薩、地蔵菩薩が祀られており鎌倉時代前期からの同寺の繁栄が窺われる。文献史料の記録どおりであれば満願寺は永福寺より 10 年早く創建されたことになるが、鎌倉時代初期、鎌倉政権や東国社会がまだ安定する以前の時期においてこの 10 年という時間差には大きな意義が認められる。永福寺より 10 年も早く相模国で尾張産の瓦を使って堂宇を建立し、優れた仏像を祀った満願寺の繁栄は同寺を創建した佐原氏の力の象徴そのものと考えられる。

八事裏山窯は尾張国の八事迫の領域内に所在するが、近年、尾野善裕は承久の乱（1221 年）以前から山田氏（清和源氏重宗流）が八事迫の在地領主であったことをふまえ、山田重時が大治年間（1126 ～ 1131）に相模守を務めていた時期に三浦氏との関係を築いていたのではないかとの示唆に富む見解を発表している [(15)]。尾野氏は言外に山田氏と三浦氏の関係が三浦一族の佐原氏に結びつくことを期待しているようである。だが満願寺の創建はさらにこの半世紀後のことであり、満願寺で八事裏山窯産の瓦が出土することの決定的な理由が明らかになったわけではない。窯跡所在地の所領関係からの説明は今後も必要になろう。

おわりに

今回の検討により満願寺遺跡の瓦の変遷、特に軒瓦のセット関係を明確にし、満願寺遺跡出土瓦をⅠ期瓦とⅡ期瓦に区分することが出来た。その年代についてもⅠ期瓦を 12 世紀末、Ⅱ期瓦を 13 世紀前半に位置付けた。この年代は史料から知られる寿永３年（1184）と貞応３年（1224）にそれぞれ該当する。これらの年は鎌倉幕府成立前夜、そして承久の乱直後の時期に該当する。満願寺は鎌倉時代前期の東国社会が激動する時期に創建され、再び伽藍の整備が行われた寺院であったのである。源頼朝ある

いは鎌倉幕府が創建、修理をした永福寺の瓦とも比較も行ったが、年代的に満願寺の創建や伽藍整備はそれぞれ永福寺よりも 10 年程度先行する時期に実施されていることは注目すべき点である。佐原氏の仏教崇敬、文化摂取についての並々ならぬ熱意、尾張や京都との関係性や人脈、そして財力の在り方が満願寺の存在に表出されている。これまで三浦一族という枠組みのなかでとらえられてきた佐原氏について、再考の必要性があると考えられる。満願寺の出土瓦はそうしたことを考えるうえで極めて重要な歴史的意義を有する資料である。

【註】

（1）尾野善裕 1992「八事裏山窯址群の基礎的再検討」『古代人』53　名古屋考古学会
　尾野善裕 2022「八事裏山窯の瓦生産」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会
（2）横須賀市教育委員会　1992『岩戸満願寺－満願寺境内遺構確認調査報告－』（横須賀市文化財調査報告書第 25 集）
（3）小林康幸・高橋香　2019「相模」『中世瓦の考古学』高志書院
（4）原廣志　2002「第 4 章　出土瓦について」『史跡永福寺跡』遺物編・考察編　鎌倉市教育委員会
（5）前掲註（4）に同じ
（6）小林康幸　2001「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』第 36 号　埼玉考古学会
（7）小林康幸　2022「永福寺式軒瓦と鎌倉御家人」『永福寺と鎌倉御家人』（神奈川県立歴史博物館特別展図録）小さ子社
（8）小林康幸　1989「永福寺跡出土瓦の生産瓦窯について」『史跡永福寺跡（昭和 63 年度）』鎌倉市教育委員会
（9）高橋香　2022「相模の八事裏山窯産瓦」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会
（10）厚木市　1999『厚木市史』中世通史編
（11）前掲註（4）に同じ
（12）原廣志　1981「鶴岡二十五坊跡出土の鐙瓦」『鎌倉考古』Ⅴ ol.11
（13）神奈川県立埋蔵文化財センター　1986『千葉地東遺跡』
（14）小林康幸　2020「中世相模における尾張産瓦の受容（予察）」『芙蓉峰の考古学』Ⅱ　六一書房
（15）尾野善裕　2022「八事裏山窯の瓦生産」『シンポジウム永福寺式軒瓦の成立と展開発表要旨』中世瓦研究会